

黒眼、変わらない価値

15 Black Eyes, Invariable Value

最後の「黒」は私達の瞳の色、黒眼についてです。実はこの「黒眼」、正確には虹彩と呼ばれる部分の「黒」に京都紋付が下染めにこだわる理由があります。瞳の「黒」は私達の色を感じ方に関わる「黒」なのです。

私達が色を感じる光が眼に入るとき、光の入り口である瞳孔の周囲にある虹彩がカメラの絞りのように働いて、奥へ通す光の量を調節します。このはたらきによって私達の眼は余分な光の刺激を受けずにすむのです。しかし瞳孔がこの役目を果たすためには、瞳孔以外の部分が外部からの光を完全に遮断する必要があります。このときに活躍するのが太陽の光を遮断する機能をもつメラニン色素です。メラニン色素とは太陽の刺激から身をまもるために、頭髪や皮膚にも含まれている暗褐色の色素で、太陽の照射が強く照射時間が長い地域で発達・進化した人類の眼や髪、皮膚に多く含まれています。日焼けであることからなにかと女性から嫌われがちなメラニン色素ですが、メラニン色素を多く含む虹彩は光の調整をするのに有利なのです。そして、虹彩に多量のメラニン色素が分布する黒眼は、瞳孔を通して必要量の光が内部に導かれるため、結果として微妙な色調も感じ取る事が可能なのです。

あいまいな色調の中に美を感じ、月光下の世界のような単色の色彩をも好む私達の色彩感覚に、この黒眼が与えた影響は言うまでもありません。また日本には春夏秋冬の四季があり、草木もまた四季の変化に応じて、若葉、青葉、紅葉、落葉して環境の色を変え、それとともに温度も暖一暑一涼一寒へと変化します。このように推移的に変化する環境に順応した私達日本人の眼と色彩感覚は非常に鋭敏なものになりました。

京都紋付の黒染めには、茜、藍、茶葉、など非常にさまざまな彩り豊かな下染めの過程があります。そしてこうした下染めの数だけ異なる黒の風合いがあります。それらの色彩鮮やかな下染めは深みのある黒を実現するために染め抜かれるのです。京都紋付が黒の中に潜む微妙な色あいまで徹底してこだわり続けるのは、伝統的な価値感によるものだけでなく、身体的、風土的な特徴をもつ鋭敏な眼をも満足させる必要があるからです。身体的、風土的なものであるからこそ時代を経ても移り変わる事のない確かな価値基準だと考える、きわめて率直なこだわりだといえるでしょう。